

## 母子関係の理論

### ① 愛着行動

J・ボウルビー 著  
黒田実郎  
大羽泰 共訳  
岡田洋子  
岩崎出版社

本書はJ・ボウルビーの Attachment and Loss 全三巻のうちの第一巻「Attachment」の全訳である。ボウルビーはフロイドの後をついで、初期の母子関係についてすぐれた業績をあげているといわれている。一九五一年 Child Care and the Growth of Love を著わし、(黒田実郎訳『乳幼児の精神衛生』岩崎出版社)「母性保護の喪失による不幸な結果と、それを防止する対策について言及したが、そのような不幸な結果がなげもたら

されたかという点についてはほとんど触れられていなかった。……その理由はその頃には、このことを説明するだけの適切な知識や資料がなかったからである。

……(はしがきより)その後、同僚のJ・ロバートソンと共同研究に入り、乳幼児期に母親と離別した子どもの人格発達について組織的な観察、研究を行ない、その成果をまとめる段階で、観察資料だけでは不十分だと思ふようになり、理論的考察を加え、本書の誕生となったのである。

Attachment (愛着) ということばはここ数年の間に、広く一般に知られ、使用されるようになったが、前述の著書の中では全く使われていなかったのである。

ボウルビーは本書の中で、愛着行動を「母性的人物へ最も接近した状態を保持するように幼い子どもを導く行動」又は「母親に対する子どもの結びつき」と呼

んでいる。彼はこの愛着の発生の起源について、豊富な資料と文献を駆使して、

新仮説、愛着行動制御説 (control theory of attachment behavior) を確立した。従来の学説を四つに分類し、それぞれ、二次的動因説、一次的对象吸引説、一次的对象密着説、一次的復帰願望説と名づけ、それぞれについて吟味、批判を加え、不備を指摘し、愛着行動は重要な社会的行動の一つであると同時に、固有の生物学的機能が含まれていることに着目した。そこで彼は本能的行動としての基礎を求め、実に本文の二分の一を占める膨大なスペースを本能的行動の考察にあてた(第II部)。最近の分析的生物学と制御理論の発達、比較行動学、実験心理学、及び神経生理学の成果が統合されて、本能理論の基礎が形成されたことを見出し、彼の愛着行動の制御理論を提出するに至ったのである。第III部は愛着行

動一般について動物のレベルを含めて詳細に考察し、第Ⅳ部（人間における愛着行動の個体発生）で、人間の新生児からの原始的反応の観察と、愛着行動パターンの発達段階や経過についての精密な記述と考察を行なっている。

この本はただ、資料や文献の総覧といった性質のものではなく、著者の愛着行動に関する新理論提出のための試論であり、基礎づけの論述である。おびただしい資料や文献が縦横に駆使されているが、そこには適切な選択と批判がある。母子関係について今までオーソドックスな権威を持っていたフロイド等の精神分析理論や、学習理論が厳しく批判されているし、ピアジェの自己中心性の概念や、スピッツの「八か月不安」、見知らぬ人への不安」の見解などに対しても独自の立場から反論を行なっているのを見

ることができる。それは正当な批判であり、Attachment という一つの事柄を究明するためには一事もゆるがせにできない著者の態度はまさに行動研究に取組む科学者としての真髄であるう。

訳も流暢で、よく日本語になっていると思われるが、中に用語の扱い方が適正でないように思われる箇所が二、三あるのが気になる。ことに動物行動の用語で、同一の原語なのに、初めの箇所と後の方とは全く異なって取扱われているところがあり、これは訳者の間で、全編を通しての照合や統一をとる余裕がなかったためかとも考えられる。また、訳者は動物行動に関してはあまり慣れていないためかとも思われる。全体の流れには殆ど影響がないのではあるが、私には少々残念なことに思われるのである。

（浅見千鶴子）

### 教育改革者の群像

中野 光 著  
国土社

本書にとりあげられた八名の教育改革者たちは、いずれも大正期において精神的に活躍した人たちである。その中の一人に北原白秋がいるのは興味深い。また大正デモクラシーといわれる歴史潮流に支えられた改革運動を、主体的になつた多くの教育改革者たちのイメージを、より具体的に想像できるように紹介している。それ故、大正期の教育史を血の通った内容のあるものにしてている。同時に同著者の『大正自由教育の研究』の一読をもすすめたい。

（山道陵子）